

氏名	たかのひではる 高野秀晴
学位(専攻分野)	博士(教育学)
学位記番号	教博第69号
学位授与の日付	平成20年1月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	教育学研究科教育科学専攻
学位論文題目	18世紀日本における民衆教化の展開と学問への視線 ——石門心学を中心に——

論文調査委員 (主査) 教授 辻本雅史 准教授 駒込 武 教授 前平泰志

論文内容の要旨

本論は、18世紀日本における学問の展開過程を、民衆の視線にさらされ続けた過程として描き出すことにより、学問が民衆とは無縁のところから超然と展開していくかのような通念を問い直すことを試みている。学問が民衆の視線にさらされる局面として、それが民衆教化の場面で説き広められる局面が考えられる。そこで本論文は、当該期の教訓書(教化の書)を主な考察対象に取り上げ、テキストにおける教えの説き手が、教えの受け手をどのように想定しているか、そして、その想定によって、説き手がいかなる立場に自らを追い詰めていくかを明らかにすることにより、教訓書における教えが、受け手としての民衆と関わりながら展開する様相を描いている。

まず、序章「民衆の学問への視線」では、18世紀日本における民衆と学問との関わりを概観したうえで、先行研究を検討し、本論の課題と方法を示している。

第一章「〔小人〕の包摂と疎外—貝原益軒『大和俗訓』について—」では、民衆に学問を説き勧める教訓書の先駆的な例として『大和俗訓』を取り上げている。学問を世俗の用に資するものではなく、「天地」に仕えるためのものと位置付ける益軒は、読者として想定する「小人」に対して、世俗から「志」を引き剥がすことを求めている。だが、他方で益軒は、読者としての「小人」に、世俗における「小人」を他山の石と見ることを要求している。この点をもって、益軒の教えには、「小人」を学問に包摂する論理とそれから疎外する論理とが同居していたと論じている。

第二章「〔化物〕の学問—河内屋可正旧記』について—」では、益軒の教訓的な著作の読者の一人として、河内屋可正を取り上げている。庄屋としての立場もあり、益軒のいうようには世俗から「志」を引き剥がすことができなかつた可正が、世俗に見合った学問を模索し、その学問を近隣の者に説き示す役割を自らに課している動向を明らかにしている。

第三章「〔町人の学問—その困難性—」では、常盤潭北『民家分量記』、西川如見『町人袋』などを取り上げ、それらが百姓や町人の世俗に応じた学問を再構成しようとするものであったことを指摘している。また、八文字屋本に分類される江島其蹟『世間子息気質』などのように、教えの再構成よりも、教えの適合しない世俗の実態をいきいきと描き出すことを主眼にした著作の存在にも言及している。

第四章「〔赤裸〕になる覚悟—石田梅岩『齊家論』について—」では、主に町人を相手に教えを説いた梅岩が、自らの教えを「町人の学問」とは称しないで、「聖人の道」にこだわり続けたことに注目し、世俗に適合する学問ではなく、世俗を改変しようとする学問を、梅岩の思想に見出している。第五章「〔鳴子〕の教え—石田梅岩について—」では、「聖人の道」に没入せんとする梅岩の姿勢が、聖人ならざる自らの姿を浮き彫りにし、その結果、梅岩が教えを説くために「身を棄て」るに至った動向を明らかにしている。

第六章「継承という問題—手島堵庵を中心に—」では、梅岩の教えを弟子たちがいかに継承したかを考察している。とりわけ、手島堵庵が梅岩の教えを教化運動によって説き広めんとするに至る動向を描き出している。第七章「石門心学の創出—手島堵庵について—」では、堵庵の教化運動(後に「石門心学」と呼ばれる)についてさらに検討を加えている。堵

庵は、梅岩の教えを「無造作で心安き」教え、したがって、「庸人」によく見合った教えと位置付けることにより、「卑俗」な言葉を縦横に盛り込んで教化を展開する。だが、その「卑俗さ」の容認が当時の学問の通念とかけ離れていたことを明らかにしている。

第八章「学問からの逸脱—石門心学への批判—」では、「学問」から逸脱する石門心学の様相を、石門心学に寄せられた様々な批判的言説の検討を通して明らかにするとともに、当時、新たな民衆教化のあり方を模索する試みとして登場してきた談義本についても検討を加えている。第九章「届かぬ教化—石門心学への批判2—」では、石門心学への批判を盛り込む談義本を取り上げている。石門心学が当時の学問の通念から逸脱するだけでなく、民衆教化としても富裕な民衆にしか適合しないという限界が指摘されていたことを明らかにしている。第十章「「頑民」への教化—脇坂義堂『心学教諭録』について—」では、前章で取り上げた批判とは裏腹に、石門心学が都市の下層社会を構成する「無宿」に対して教えを説く機会が与えられたこと（幕府の人足寄場での教諭）に注目し、そこでの教化のあり方を、脇坂義堂『心学教諭録』を通じて検討している。

補論「「臍」のゆくえ」では、世俗における有用性と無用性のはざままで揺れ動く学問という観点から本論全体をまとめ直している。結章「まとめと展望」では、18世紀日本には、「用」と「無用」の範疇そのものを問い直すものとして学問を位置付ける動向があったことを指摘し、かかる動向の発掘を今後の課題として提示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、石田梅岩と石門心学の思想と学問を、18世紀日本の教化史のなかに位置づけることを主要な主題としている。その場合、梅岩や石門心学者たちの著作を読み解くだけでなく、18世紀日本における民衆と学問の関わり方を問う、より普遍的な問題枠の設定の中で本主題を考察している。とくに石門心学をめぐる石門心学内外の多様な議論に目配りをする中で、民衆の視線にさらされた学問の振幅を捉えようとする独自の視点が、現代における学問の意義を問う著者の問題意識と呼応して、本論文のオリジナリティを際立たせている。本論文が達成した成果を、以下に具体的にあげる。

第1に、石田梅岩と石門心学の研究に新しい知見を加えた点が高く評価できる。先行研究は、梅岩の著作の思想史上の独創性を高く評価する一方、それを継承した石門心学を梅岩学の通俗化とみなすものであるか、石川謙に代表される石門心学普及史の実証的研究に終始するものであった。これに対して本論文は、梅岩と石門心学者の著作を「学問が民衆と出会う場」とみる視点から、学者(教化者)と民衆の関係を読み解いた。その読み解きの作業はテキストに寄り添って、丁寧かつ精密に、緊張感をもってなされている。

第2に、その著作解説の作業によって、梅岩の「開悟体験」の意味と、開悟の地点から語り出される教化者・梅岩の思想的意味が精密に解明されている。すなわち「聖賢ヲ身ニ引キ受ケ」、道を説くことが自らの「病」と自覚されるほどに、梅岩が道に没入したその思想的意味が、「身ヲ棄テ」る（妻子を持たず清貧に生きる）生き方を自ら選択したという事実の中に、説得的に読み取られている。また梅岩の、妥協を知らない潔癖なまでの徹底性の思想的位相も、教化に没入した生き方として解き明かされている。この読解は鮮やかで、梅岩の思想研究に新たな知見を付加している。

第3に、梅岩の教えの「相統」(継承)に関して創見を提示している。先行研究では、手島堵庵による教化が、梅岩学の必然の継承とされてきたのに対し、杉浦宗仲などの継承のあり方をもとに、教化活動以外にも多様な継承のあり方があったことを、資料に基づいて精密的確に実証している。併せて「語録」の読み解きにより、教化に専念した堵庵の「相統」の思想的解明に成功している。すなわち堵庵の「相統」それ自身が石門心学創出過程に他ならないことを述べ、それを梅岩学「通俗化」過程と捉えてきた通説を的確に批判している。

第4に、梅岩と石門心学を、18世紀日本における民衆と学問の関係を問う文脈において捉える視点を導入し、梅岩に先行する民衆に関わる諸著作を取り上げた点は、本論文の視野の広さを示すものと評価できる。すなわち貝原益軒の『大和俗訓』で教化対象の限定が余儀なくされたことが確認され、『可正日記』で大坂近郊庄屋の学問の問題が考察され、常磐潭北、西川如見、それに江島其蹟の八文字屋本などの著作により町人や百姓における学問の一定の有効性とその困難さが検討されている。その後を受けた梅岩と石門心学が、彼らが問うた問題に立ち向かう必然の学として立ち現れたとことを、解明した点も評価できる。

第5に、石門心学外部から心学に向けられた批判的視線に丁寧に目配りをし、石門心学の同時代的位相を客観的に示すことに成功している。なかでも石門心学批判言説が、心学を学問からの逸脱と見なしていると指摘し、石門心学教化の届く範囲とその限界を、様々な文献によって解明し、その教化史上の位置づけに大きく貢献している。出版書の心学への言及に注目して、梅岩と石門心学の思想史的位置を提示した研究はこれまで類を見ず、これも本論文の大きな成果である。

第6に、従来文芸として扱われてきた談義本等の戯作が、盛んに石門心学に言及している事実注目して、教化をめぐる石門心学と談義本とが交錯する諸相を解明したのは、本論文中とくにオリジナリティの高い部分と評価できる。この分析により、談義本も教化本として捉えることが可能であることを明確にし、結果的にそれは、八文字屋本や戯作本のもつ教化史上の意義を初めて明らかにし、ひいては教育史研究の視座を格段に広げることになったと評価できる。

以上、本論文の達成点は高く評価できる一方、その新しさは、本論文の内包する危うさと裏腹の関係にあると指摘された。たとえば戯作本の類は、風刺やパロディなど巧みな仕掛けがなされており、それを教化の視点で読み解くには、分析する側に一定の方法論的備えが求められる。だが本論文では「教化を行う側と受ける側がぶつかり合う場、ぶつかり損ねる場としてテキストをとらえる」という着眼こそ明確であるものの、必ずしもその方法論的根拠が示されていない。問題点として残されているところである。

また「学問」および「民衆」等のキーワードの概念が明確ではないことの問題性も指摘された。もとより本論文が、学問が民衆に関わる際の揺れと振幅を問うことを目指す以上、固定的概念で捉えられないとしても、「民衆」とはテキスト作者が想定した読者であるという本論文の定義は曖昧さははらむ。この点について、作者によって想像された「民衆」のあり方が、現実の民衆との接触によって脅かされ、解体されるという側面にこそ目を向けるべきではないか、との意見も出された。さらに心学は語りの教化であるが、それとは位相を異にする出版テキストを素材にして石門心学の教化や民衆を読み解くことの問題性を指摘する意見もあった。

しかしこれらは本論文の欠陥というよりも、18世紀日本における民衆と学問の関係史のなかに石門心学を意味づける、というすぐれた成果に、事後的に見いだされた課題にほかならず、いずれも本論文が達成した学問的価値を損なうものではないと認められた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成19年11月15日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。